

原爆の図丸木美術館改修計画案発表（抄録）

wyes architects 齋賀英二郎 さいがえいじろう

ゲストコメンテーター 水沢勉 みずさわつとむ
八木香奈弥 やぎかなみ

内山 章 うちやまあきら

美術館の関係性を再構築する

岡村（司会） 丸木美術館は一九六七年に開館し、数年おきに増改築を繰り返してきました。近年は雨漏りや浸水も目立つようになり、「原爆の図」を未来に残すため、二〇一七年の開館五〇周年に「原爆の図保存基金」を立ち上げました。すでに国内外から三億円の寄付が集まっています。一方、工費が高騰している現実もあります。本日は設計を担当している wyes architects の齋賀英二郎さん、八木香奈弥さんに改修計画案を発表していただきます。

水沢 保存基金の立ち上げ当初に収蔵庫と展示室だけは最新の機能で新築を、と意見交換をしましたね。その後、wyes architects の調査報告を聞き、既存の建物の歴史をどれだけ未来に伝えられるか、「原爆の図」

素晴らしいと思います。

齋賀 丸木美術館の建築は、何度も細切れに増築を繰り返してきたこと、できるだけ前の建物を残して改修していること、作家や設計者が意図したものと意図しないものが混在していることが特徴です。雨漏りなど建築の性能にかかわる弱点を改善するだけではなく、建築の各部分の関係性やつながりを変えていくことが今回のテーマになると考えました。建築を新しく生まれ変わらせるのとは違うアプローチを考えたい。

八木 大きな変化を生み出すのではなく、もともと美術館に備わっている特徴を捉え、関係性を整理し、基点として考えるスタンスです。

齋賀 この美術館には、なぜかいろんな人がものを持ち込んでくる。調査をしていると、いつのまにか居座つたり、取り除かれずに残つたものを発見することができる。増改築を繰り返すことで生まれてきた使用と改造の痕跡や居残つたものを「変化のかけら」と呼んでいます。

八木 「変化のかけら」は、この場所でどんな人がどのような経過をたどつてそうなったのかを想像し、新しい建築家の物語に収斂されないよう、ワークショップを開いたり、

齋賀 私たちは変化を続けてきた「原爆の図」の美術館がこれからも生き抜いていくために何ができるか今までの増改築の歴史をより踏み込んで読み解くなど、計画の進め方だけ

を考えています。そのため美術館の各要素の関係性を再構築することを目指している。そのときに「変化のかけら」は、次の変化の可能性を造していること、作家や設計者が意図したものと意図しないものが混在している上でも重要な役割を果たすと思っています。

八木 「原爆の図」のある美術館というのは変わらないけれども、そこには人が関わって成長していく姿には寄り添いたいと思っています。

流れてきた時間の重なりを見せる

齋賀 今回の改修では、一階の「原爆の図」展示室の半分を収蔵庫にして、もう半分を事務室に変更します。ここは美術館に残る資料を保管する役割を果たす場所になります。そして現在の事務室の場所はミユージアムショップになります。今の事務室の天井裏は物置になつていて、壁を取り払つて「棧敷」として開放しようと思っています。今は機能していない都幾川を見下ろす窓は、美術館と外とのつながりを保つ要素として残したいと思っています。

新しい事務室の正面の壁はコンクリートブロックの間仕切りを部分的に取り除いて、エントランスとつなげることを考えています。

八木 天井材を取り払うことで開館当初の鉄骨が見えてきます。増改

築を繰り返してきた時間の重なりを見せていきたいと思っています。

齋賀 階段脇にはエレベータを設置します。ここでも階段途中のコンクリートブロックを部分的に取り除き、物置を「棟敷」として開放したい。見えなくなっているものを見るようになります。一九六七年の開館当时の架構を乗り越えていくルートにしたいと思っています。

二階の「原爆の図」展示室はフラットな天井を勾配天井に変えて、トップライトの光をやわらげるテントをかけます。今の美術館は大雨や強風の日は内部まで音が聞こえてくる。窓や開口部も美術館としては多い。展示・保存の環境の性能をあげようとするが、どうしても今の美術館らしさが失われてしまう。それでも、できるだけ外とのつながりを残しながら変えていきたいと思います。現在は二階に八点の「原爆の図」が展示されていますが、十点を展示するために間仕切りを解体して、ひとつ大きな展示空間にしようと思っています。天井から吊るテントという仮設的なアイデアは、「原爆の図」の可変性から連想したものです。一階の複雑な変更の経過の表現に対し、二階は「原爆の図」の展示に限定して要素を間引くことで役割の差異を明確にしたいと思います。

一階廊下は左右の壁の表情に差をつけ、かつてのよう作品を展示できる場所に戻そうと考えています。

八木 二階を増築したときにできた不自然な空洞が、今は一階の壁のなかに隠されている。壁を部分的に開けてアルコープ(くぼみ)に作り替え、廊下の途中で腰をかけたり、壁面の展示を観たりする時間の時間を生むスペースを考えています。

齋賀 この長い廊下は、開館当初のかたちを残し、奥に追加された建物につながっていく特徴的な空間です。その空間に、ちょっと立ち止まる役割をもたせたいとと思っています。

小高文庫 一階の展示室の役割はそのままにして、アトリエの雰囲気もできるだけ残したいと考えていますが、壁を部分的に取り払って境界を変化させたいと思っています。

八木 一階は展示室として閉じた空間になつていますが、吹き抜けを作ったり、足もとに開口を作つたりすることで、二階や外の雰囲気を感じられるようにしたいと思います。

齋賀 現在の企画展示室は、「原爆の図」の後期の四点を常設展示します。今より低い位置に新しく天井を設置して、テントを吊ることでトップライトの光をやわらげようと考えています。二階と考え方は同じで、

る要素を制限して、となりあう伝統的な建築である小高文庫との差異を明確にしたい。丸木美術館は建設された時期も構造もサイズも素材も異なる建築が寄せ集まっている。そういう丸木美術館らしさを表現できる

八木 今は屏風の「原爆の図」を展示に置いていますが、今後は屏風と壁にフラットにかける展示を組み合わせることも考えています。今まで使つていた展示台の仕上げ材は丁寧に取り外して、新しい展示台に転用しようと考

えています。

齋賀 新館は常設展示室から企画展示室に変更するため、照明の移動を簡単にするフレームを追加し、展示の幅を広げようと考

えています。テラスと接続した展示ができる大型可動壁も計画に取り入れようと検討しています。

八木 新館の奥に落ちける場所を作りたい。テラスから外の敷地をまわれる階段の設置も考えています。



11月23日に丸木美術館で開催された改修計画案発表。トークの様子は録画し、丸木美術館の公式YouTubeチャンネルで配信しています。https://www.youtube.com/watch?v=nUzGmj2Lm3Y

齋賀 丸木美術館はいくつもの建築がパツチワーケ状に重ね合されて作られています。どこを切り取つても同じ形がなく、全体像をどうえにくい。「変化のかけら」に着目しながら、部分的に古いものを除いたり、新しいものを加えたりして、各部分の関係やつながりに変化が生まれてくれば、たくさん表情をもつたこの美術館に流れてきた豊かな時間を表現できるのではないかと考えています。

同じ形がなく、全体像をどうえにくいため、「変化のかけら」に着目しながら、部分的に古いものを除いたり、新しいものを加えたりして、各部分の関係やつながりに変化が生まれてくれば、たくさん表情をもつたこの美術館に流れてきた豊かな時間を表現できるのではないかと考えています。

「美術館らしくなさ」を継続する

内山 発表を聞いてワクワクしました。私はこのエントランスが大好きで、全然美術館らしくない、公民館に来たような感じなんですね。普通、増築は新しいものを加えて古いものを隠す作業ですが、今回は歴史を露わにすることで、新しい親しみやさが生まれてくる。一方で、これからどう生き残っていくかが大事。古い建物は断熱性能が問題なので、予算の課題はあるが、息の長い在り方を探ることが必要と思いました。

岡村 絵画を保存し、快適な鑑賞環境を提供する上で、効率よく環境を整える工夫はありますか？

齋賀 屋根や壁の断熱性能を高めることが重要ですが、この美術館は増改築を繰り返し、平面積に対しても壁の面積が多い。収蔵庫と「原爆の図」展示室は比較的環境変化の少ない場所を選んだので、どこまで重点的に整備できるか考えたいです。

岡村 これまでの増築は、より展示室を大きくする変化でしたが、今回の改修はバックヤードを作つて展示室を減らすんです。常設展示を減らして、作品保存も考慮する。それは美術館の今後の負荷を減らすための重要な変化と考えています。

水沢 改修は、風通しを良くするチャンス。私は接頭辞の「un-」にこだわっていて、丸木美術館も既存の濃厚な記憶や経験をほどいてみる必要がある。棧敷や廊下の「抜ける」工夫は「up」すること。環境に目を向けて外に行きたいと思わせる導線になる。その先の散歩道に位里asakiが生まれてくる。一方で、これや俊さんの彫像を置くのも良い。そこから川へ降りていくという、これはひとつ提案ですけど。

岡村 齋賀さんは長い直線の廊下を早い段階から気に入っていました。テラスから外に抜ける階段の構想とつながっているんでしょうか。

齋賀 この美術館には視線が突き抜けていく軸がある。かつては堅穴住居があつたり、敷地とつながっていた。階段を加えることで、直線の意味が変わったと思います。

内山 考えさせられる作品が多いので、呼吸を変える場所があちこちにあることが大事と思いました。

岡村 アルコーブの発想は面白いですね。今は掃除のモップが置いてあたりするのですが、隙間に開館当時の構造が残されている。

齋賀 建築として名づけようがない隙間。変化の過程で生まれた隙間は、直接「原爆の図」と関係ないですが、いろいろな方がかかわっていることが読みとりました。建築に関する言葉を選んだのですが、私が選ぶ言葉と八木の選ぶ言葉も違うんですね。

岡村 今のが車椅子が動きにくい。床の高低差の解消やエレベーターの設置は可能ですか？

八木 小さいエレベータなら入りそうです。優先事項と考えています。

齋賀 エレベータは、どこかを解体しないと設置できないのですが、八木が図面を引きながら隙間を発見してくれたので收まりそうです。

岡村 一方で、おふたりは、二階ができた当時に階段の天井に設置された昇降機のレールを残したいとおっしゃるんですね。そうした美術館の先駆的な姿勢を残したいと。

齋賀 半分は面白いと思ったから。昇降機を初めて使つた頃の写真を見て、イベントのようを感じたので。

八木 レールが残つていなければ気づけないので、残そうと思いました。

岡村 八〇年代の丸木美術館は先駆的な運動の実践の場でもあつたんです。おふたりは「丸木美術館」ユースを第一号から目を通して歴史を学んでくれました。「原爆の図」を未来に残すことは重要ですが、そのまわりで起きたことも改修を機に可視化していくのではと感じます。

齋賀 ニュースを読んで美術館にいろんな方がかかわっていることが読みとりました。建築に関する言葉を選んだのですが、私が選ぶ言葉と八木の選ぶ言葉も違うんですね。

八木 少人数で運営しなければいけない現実があるので、機能していくように考えたいと思っています。

(抄録まとめ：岡村幸宣)